

アポリネールと神の顕現

神の似姿に見る裏返しの図式

佐藤 文郎

1. Épiphanie

Épiphanie 及び théophanie という言葉に関して

表題の神の顕現という語はフランス語の théophanie 及び épiphanie の訳語として選んだものである。両語共にギリシア語源であり、ギリシア語で前者は「神が現れ出ること」、後者は単に「現れ出ること」を意味している。又、épiphanie は古代ギリシア人にとって、東方の文明からもたらされた祭礼でもある¹。しかし今日、一般的に épiphanie という語により示される対象は毎年1月6日に東方三博士による幼子イエス・キリストの訪問を祝って行われるカトリックの祭礼である（西暦380年のサラゴサの公会議で正式にカトリックの祭礼とされた）。従って、épiphanie には『マタイによる福音書』に基づき、誕生したキリストが東方の博士の目前に現れ出でた、という意味が与えられているとされている²。しかし一部の教父は、épiphanie がイエスの洗礼の日であると主張している³。つまり、洗礼を受けたイエスが洗礼者ヨハネの前に立ち現れたことをもって épiphanie とするという考え方である。このように、キリストが誰に対して如何なる状況で現れ出でたかという問題が必ずしも明確に定義されていなかったのである。つまり、東方の三博士に対して現れたのか、ヨハネに対してが現れたのかが不明確⁴であり、それに従って、当祭礼に

¹ épiphanie に関するカトリック側の教義との比較に際しては、次の文献を参照した。 *Dictionnaire d'Archéologie chrétienne et de Liturgie*, publié sous la direction du Rme dom Fernand Cabrol, Abbé de Farnborough et du R. P. dom Henri Leclercq, Tome cinquième, Première partie, Librairie Letouzey et Ané, 1922, pp. 198-199.

² 『マタイによる福音書』にはバルタザール、ガスパール、メルキオールの名は出てこない。又、3人という人数に関しても『聖書』には如何なる記述も見出せない。これらは俗信である。

³ cf. *Dictionnaire d'Archéologie chrétienne et de Liturgie*, op. cit.

又、『19世紀ラールス』にも同様の記述がある。

⁴ 現在のカトリックの見解では、東方の博士に対してキリストが現れたことをもって épiphanie とし

対する意味付けも微妙になってくる。実際、*épiphanie* の歴史は二つの解釈の攻めぎ合いの歴史である。具体的には東西教会の対立構造がその背景にある。更に、初期教会ではキリストの誕生節と東方の博士の祭礼が同日に行われており、後になって両者が分離されたことから⁵、当初より *épiphanie* とキリストの誕生を巡る問題に何らかの混乱があったことが窺える⁶。推測だが、具体的には両者を同一視する考え方があったのではなかろうか。つまり、キリスト誕生とキリストが現れ出ることとは同義であったのではないか。

特に *épiphanie* の祭礼は、キリスト教初期教会の異民族教化の時代を通してマニ教のサトゥルヌス神信仰から採り入れられたものとも言われる⁷。異端、異教に対する興味の強いアポリネールがこの祭礼に注目したとしても不思議なことではない。

又、初期教会では *épiphanie* の代わりに *théophanie* という言葉が用いられていた。従って、この二つの言葉はカトリックの中で同義語であることになる。

テキスト中に見る *épiphanie*

Épiphanie という語は『虐殺された詩人』に収録された自伝的要素の濃い一作品「ジョヴァンニ・モローニ」に見られるが、これは主人公が少年時代にローマで見た *Épiphanie* の祭礼が語られる場面である。ここでは、カトリックの祭礼の記述が回想的に簡単になされている。つまり、一般的な意味での *épiphanie* が語られているに過ぎない。

一方、*théophanie* という語は『異端教祖株式会社』の「ラテン系ユダヤ人」という作品に登場する。下にその一節を引用したい。

ヘブライ語を知っていると行った所で、俺達の大部分がユダヤの成人の祭礼でヘブライ語を辛うじて読めるという程度に過ぎない。フランスの律法学者は他国に住む律法学者にとってお笑い種でしかない。今ある『タルムード』仏語訳にした所で、ドイツやポーランドのユダヤ人に言わせれば、フランス律法学者の無知の記念物でしかない。だから、俺はユダヤ教を知らない。ユダヤ教は異教として捨て去られた。いや違う。寧ろ、異教と同様、カトリック教義の中に生き続けているのだ。俺は特に、カトリックの神の顕現に関して興味を持って

ている。

⁵ 【19世紀ラールス】参照。

⁶ 【19世紀ラールス】参照。又、*Dictionnaire d'Archéologie chrétienne et de Liturgie* ではキリスト教の初期、キリストの誕生は東の教会でのみ祝われ、キリストの洗礼は西のローマ教会でのみ祝われていたとの記述がある。

⁷ 【19世紀ラールス】参照。

いる。アレクサンドリアのユダヤ教は最早、モーゼの前に神が現れ出でたことを重要視しなくなったが、これは当時、神の顕現が寓話的で信じ難く思われたからだった。カトリックは神の顕現を用いて様々な教義を作った。神の顕現の奇蹟はミサで毎日繰り返されているし、サクレ・クール物語は、神の顕現と神人同形論を信奉する俺のラテン系ユダヤ人の血を熱くする。俺は洗礼を受けていないことを除けばカトリックなのだ⁸。

『異端教祖株式会社』という作品は十数篇のコントで構成されているが、常にアンチ・カトリックという点で一貫性を有している。上の引用文はラテン系ユダヤ人を称するガブリエル・フェルニズンが一人称の主人公に語った台詞の一部であるが、上に見られる通り、カトリックには異教的要素が混入しており、こうした要素が神の顕現に特に顕著に見られることがフェルニズンを通して語られている。この人物は殺人狂で、如何なる罪を犯しても死の直前に洗礼の秘蹟さえ受ければ以前の罪は洗い流されると信じて殺人を続ける犯罪者である。

引用文よりも少し前の箇所、フェルニズンがニーチェに対する傾倒ぶりについて語る一節がある。ところで、アポリネールもニーチェ思想に少なからぬ傾倒を示していた⁹。当作品の一人称主人公は主にフェルニズンの聞き役としての役割を担っており、事実上フェルニズンの言動を軸にして物語が構成されている。一人称の主人公は常に受動的で、出来事を読者に報告する以上のことをしない。フェルニズンの言動に価値判断を与えることはあるにせよ、それは常識的範疇を決して超えることは無い。従って、殺人に関しては別としても、フェルニズンをアポリネールの代弁者として考えて差し支えな

⁸ Apollinaire, *Œuvres en prose I*, textes établis, présentés et annotés par M. Décaudin, Paris : Gallimard, 1977, (Bibliothèque de la Pléiade ; 267), p. 103. (以降、プレイヤード版の *Œuvres poétiques* は *Po*, *Œuvres en prose I* は *PrI* と表記する) :

«L'hébreu ? c'est à peine si la plupart d'entre nous le savent lire au moment d'être Barmitzva : Nos savants hébraïsants font sourire les rabbins étrangers ; et la traduction française qui existe du Talmud est, au dire des juifs allemands ou polonais ; un monument de l'ignorance des rabbins de France. Donc, j'ignore la religion juive, elle est abolie comme le paganisme, ou plutôt, non, de même que le paganisme, elle survit dans le catholicisme qui m'attire par ses théophanies surtout. Le judaïsme alexandrin ne fit plus cas des théophanies des dogmes divers. Ce miracle se renouvelle chaque jour à la messe. L'histoire du Sacré-Cœur fait délirer mon âme ancienne de juif latin, épris des théophanies et des anthropomorphismes. Je suis catholique, sauf le baptême.»

⁹ アポリネールはしばしばニーチェに関して言及したのみならず、彼の超人思想の片鱗が作品各所に見られる。マリ＝ルイーゼ・ランタンクルやクロード・ドゥボンといったアポリネール研究者やピエール・ブリュネルもアポリネール作品中のニーチェの影響に関して言及している。アポリネールの蔵書中にも『偶発の黄昏』や『悲劇の誕生』の名が見られる (*Catalogue de la Bibliothèque de Guillaume Apollinaire*, établi par Gilbert Boudar avec la collaboration de Michel Décaudin, CNRS, 1983)。

ただし、両作家のテキストを本格的に照合した先行研究は未だ存在しない。
cf. Marie-Louise Lentengre, *Apollinaire le nouveau lyrisme*, Jean Michel Place (Collection Surfaces), pp. 88-91.

いと考えられる。

彼は又、ニーチェ思想はユダヤ教を取り入れることで成立したという意見を述べているが、これにはもちろん客観性が無い。この人物には自分の傾倒する思想を無理にユダヤ教を結び付けようとする傾向があるように思われる。そこから察するに、引用文中の『アレクサンドリアのユダヤ教』とはアレクサンドリア学派、すなわちネオ・プラトニズムを指しているのではないだろうか。その場合、フェルニズンは当思想に対するある程度の親近感を併せ持っていることになる。しかし、これは仮説の域を出ない。

さて、ここでの神の顕現とは如何なるものであろうか。カトリックにおける神の顕現の例として引用文中ではミサにおける奇蹟とサクレ・クールが挙げられており、前者は具体的に聖体拝領を指すと考えられるが、パンとワインの中に神が現れ出るという考え方はカトリックの教義を支える象徴体系にとって微妙な問題であろう、後者、すなわちサクレ・クールにしても然りである。更に、神人同形論(anthropomorphisme)に至っては完全に異端と見なされるであろう。偶像崇拜とも関係の深いこの語は、神が人と同じ感情を有し、人と同じ姿をしていると信じる異教的要素を指して用いられる言葉である。ギリシア・ローマの神々もこの範疇に入る。観念的なアレゴリー体系によって成立するカトリックの聖体拝領の教義とは一線を画さねばならない。

以上より、少なくとも上の引用文中でアポリネールにとっての神の顕現を考える際にはカトリックの教義に反するものと考えることが出来る。故に、カトリックの教義とは別の所に、アポリネールにとっての神の顕現の意義を求める必要がある。その際に問題になるのは神人同形論との関係である。従って本論においては、アポリネール作品中で神の顕現と神人同形論が如何なる関係にあるかの手掛かりを得ることを試みたい。又、それと同時に、先に見た聖体拝領、洗礼、誕生節、神の顕現の結び付きも軸にして論を展開したい。

2. メルランと裏返しの誕生節

裏返しの洗礼と裏返しの誕生節

先の「ラテン系ユダヤ人」における引用文の後、場面はフェルニズンの洗礼を巡り急展開を見せる。この人物はパリ市内で女子供、老人等の弱者相手に凄惨な凶行を繰り返し、最後に自ら毒をあおった後に、通り掛かりの娘ネ

ラに洗礼を施してもらおう。これにより洗礼以前の罪は悉く洗い清められることになる。直後、フェルニズンは息を引き取るが、その体から芳香が漂っており、フェルニズンの最期に立ち会った2人の警官のうち、彼を酔っ払い扱いた警官は動脈瘤破裂で間もなく死亡し、親切に最期を看取った警官は遺産を相続して大金持ちになる。更に、輪廻転生とも受け取れるが、ネラはこの事件を発端に堅い信心を起すに至る。つまり、フェルニズンの洗礼に伴い奇跡が起こるに至るのである。ところで、彼は洗礼について次のように述べている。

俺はもうメシアの到来を信じていない。しかし、洗礼には期待する所がある¹⁰。

キリスト教の最後の審判に対するアンチテーゼである。従って、この洗礼は通常の洗礼と異なる、裏返しの洗礼と呼ぶことも可能かもしれない。フェルニズンの受けた洗礼の水はドブ水に過ぎず、恐らく馬の尿であった。一人称の主人公はこの事実に拠って、フェルニズンがカトリック教会により聖別されないことを暗示している。ではカトリックに対して‘如何に’裏返しになっているのか。如何なる形で転倒が行われているのか（この問題は最終的に次章で解決されるだろう）。

フェルニズンに関してもう一つ付け加えるならば、彼が主人公の家に持参した本の中にドン・カルメ著『精霊の出現、ハンガリー、モラヴィア等の吸血鬼或いは幽霊に関する概論』という書物があり、その主題は *apparition*、すなわち「現れ出ること」、顕現に関するものである¹¹。しかも、通常の神の顕現ではなく、吸血鬼、霊の顕現に関する主題が扱われていることを題名から察することが出来る。ここにも裏返しになった *épiphanie* を確認することが出来る。

『腐って行く魔術師』にも単語こそ現れないものの、*épiphanie* の場面は登場する。湖の精ヴィヴィアヌに騙され地中に埋められ死んだ魔術師メルランの元に、東方三博士の亡霊が訪れる«*Noël funéraire*»の場面である¹²。メルランの肉体は既に腐敗を始め、声だけの存在になっている。この場面は、秣桶で生まれたイエスの代わりに、偽りの神メルランが地中の墓で老齢で死ぬ設定

¹⁰ *Po*, 103. : «Je n'espère plus le Messie, mais j'espère le Baptême.»

¹¹ cf. Augustin Calmet, *Traité sur les apparitions des esprits et sur les vampires ou les revenants de Hongrie, de Moravie, etc.*, par le R. P. Dom Augustin Calmet, Paris : Debure l'aîné, 1751, 2 vol.

¹² *Po*, 25-28.

となっており、同様に、東方三博士は既に亡霊となり、贈り物は没薬、香、金の代わりに塩と水銀と硫黄が持参され、星の代わりに影に導かれて到来する。端的に言って、これらはキリスト誕生及び東方三博士の到来における図式を裏返したものと言える。従って、メルランは裏返しの子キリストである。「ラテン系ユダヤ人」の場合と同じく、ここにも裏返しの子キリストの構図が浮かび上がってくる。しかも、この *épiphanie* は誕生節とも重ねられている。勿論、ここにカトリックに対するアンチテーゼを読み取ることも可能であるが、その先にアポリネール独自の体系、特別な意図が隠されているのではなかろうか。

偽りのバルタザール
爪の傷のように白く青ざめた顔色

偽りの神の中で最も力弱き神の子は
愛によりいと老齢にて死せり。
この神へと導く者は星ではなく、
地面の影の他に無し¹³。

上の引用は東方三博士の一人、バルタザールの亡霊がメルランの墓の前で歌った詩である。引用文中で *faux* (偽りの) という言葉がメルランと東方の博士の双方に用いられている。これはバルタザールが亡霊であること、メルランの場合は既に死んでいることを共に意味していると考えられるが、同じ形容詞で双方の状態を言い表すことにより両者の間にある共通性が成立していることに注目したい。

中世の物語詩から取材した『腐って行く魔術師』は、湖或いは泉を巡ってのいわば哲学的問答によって構成されている。様々な人物、怪物が湖水近くのメルランの墓に集まり己の所信を表明する。そして最終的には、「オニロクリティック」を除いた物語の最後の部分、メルランとヴィヴィアヌの互いに似ている、似ていないという共通性、類似性の議論の中で物語の結論が示されることになる¹⁴。そうした展開の中で、そして作品全体の中で、裏返された *épiphanie* はどのような位置を占めているのであろうか。

¹³ *Po*, 26. : «FAUX BALTHAZAR / au chef livide, blanc comme les taches des ongles / Le fils d'un des plus petits faux dieux / Par amour est mort très vieux. / Pour guider vers lui pas de sidère, / Rien qu'une ombre sur la terre.»

¹⁴ *Po*, 66-72.

泉の神とのコミュニケーション

ここで上の疑問に答えるため、同作品の草稿の一部から更に引用したい。『腐って行く魔術師』の草稿はその大半が失われているが(『腐って行く魔術師』のオリジナル、プレオリジナルに対応する草稿は画商カーンヴェイラーにより紛失された)、『虐殺された詩人』の12章「愛」に転用された草稿だけが難を免れている¹⁵。下はその一節である。これはメルランではなく、決定稿では登場しないラウルという登場人物の台詞である。

泉よ！ 涸れることの無い血のように湧き出ずる泉よ！ お前は大理石のように冷たく、しかし生命を持ち、透明で、捕らえ所が無い。常に新たに常に同じ姿をしている泉よ！ 花咲く岸辺に生命を与える泉よ！ 僕はお前を崇拜する。お前は僕が一体となれる比類無き神だ。僕の渇きを癒しておくれ。僕を浄めておくれ。僕に永遠なる歌をつぶやいておくれ。宵には僕を眠りに就かせておくれ。何故なら僕は岸辺に小屋を立てて、お前を崇めて暮らすであらうから。死の近いのを知り、僕を抱きしめてくれるお前の胸に身を横たえ、溺れ死ぬその日まで¹⁶。

これは言わば、神とのコミュニケーションが提示されている場面と言えよう。ラウルの泉の神に対する崇拜には、恋愛もあるにせよ宗教的な側面が強調されていることに変わりはない。又、*communier* という語は聖体拝領を受けることと同時に、ある対象と一体となるという意味もある。ラウルが泉に身を投じれば、そこに住む泉の神と一体になれるということである。ともかく、こうした状況をコミュニケーションと見なすことに、カトリックの教義とは離れたアポリネールの考え方の特殊性が表れていると考えられる。

神話的側面から見ると、上の引用文はナルシス神話と多くの共通点を有していることに気付く筈である。泉の辺という場所設定、美男の登場人物、上の引用文中からは外れたがエコーの役どころを演じる少女(決定稿『虐殺された詩人』ではこれが主人公の恋人トリストゥーズとなる¹⁷)、ラウルが恋焦がれて泉に身を投じようとする点がこの神話との共通点として挙げられる。

¹⁵ プレオリジナルは1903年に『イソップの饗宴』(*Le Festin d'Esopé*)誌に発表され、オリジナルは1909年にカーンヴェイラーにより出版された。

¹⁶ *Po*, 1232. : «Raoul / Ô source ! Toi qui jaillis comme un sang intarissable. Toi qui es froide comme le marbre, mais vivante, transparente et fluide. Toi, toujours nouvelle et toujours pareille. Toi qui vivifies les rives où les fleurs naissent. Je t'adore. Tu es la divinité nonpareille avec qui je pourrai communier. Tu me désaltèreras. Tu me purifieras. Tu me murmureras ton éternelle chanson et tu m'endormiras le soir. Car je bâtirai sur la rive une hutte où je vivrai pour t'adorer jusqu'au jour où sentant la mort proche je m'étendrai dans ton sein où tu m'étreindras et me noieras.»

¹⁷ *Po*, 266-274.

ここから推察するに、ラウルはナルシスのように泉の水面に自分の姿を映して、それを神として崇拝している可能性がある。その場合、水面に映じたナルシス（そしてラウル）が即ち神ということになる。

メルランとナルシスの共通関係も存在する。そもそも、自分の魔術を恋人に教え逆とその魔術により地中に封印されたメルランは、自分と同じ美貌を持つ泉の反映に恋し、自ら虜になったナルシスと類似している。つまり、自分の魔術に自ら陥ることは、自分の美貌に自ら恋することと同じという考え方である。魔術と恋愛は裏腹の関係にある。これを敷衍するならば、湖の精ヴィヴィアヌが湖面に反映したメルラン自身の映像であるという考え方も同様に成立する。この場合、物語最終部のメルラン、ヴィヴィアヌの類似性を巡る議論も理解の範囲に入ってくる。すなわち、メルランはナルシス、ヴィヴィアヌは泉に映ったナルシスの像の役割を果たしており、メルランには自分の映像であるヴィヴィアヌを捕らえること、一体になることは出来ない。従って、ヴィヴィアヌは結局、メルランの実体の無い影に過ぎず、一方が真、一方が偽という点で両者は似ているようで、本質的な相違点を抱えている。しかし、一度メルランが埋葬され死んだ時点から、両者共に実体の無い、偽りの存在、死の状態となり、両者間の真の類似性が成立し、コミュニケーションも可能となるという議論である。欺かれ地中に封印されて死んだメルランは、この一点をもってヴィヴィアヌに逆転勝利を収めることが出来るのである。

メルランが偽りの神として自身を顕現する裏返しの誕生（つまりメルランの死）は、裏返しのコミュニケーションの条件となっている。この図式をラウルに適用するならば、彼が泉に身を沈め、溺死した瞬間に神とのコミュニケーションが成立することになるのだろうか。『虐殺された詩人』の主人公クロニアマンタルが虐殺された後に神格化される場面は、まさにメルランにおける裏返しの誕生節の再現と考えることが出来よう¹⁸。

更に指摘すれば、泉の神とのコミュニケーションは、神が例え映像としてであるにせよラウルの眼前に立ち現れることを前提としている。これはカトリックのコミュニケーションとは相違点をなし、しかも、コミュニケーションに神の顕現を見るフェルニズンの考え方と一致していることが理解できる。「ラテン系ユダヤ人」で見出された *épiphanie* は『腐って行く魔術師』でその一貫性を確認され

¹⁸ Po, 300-302. クロニアマンタルは迫害の後、恋人であるトリストゥーズにより虐殺されるが、死後に神格化されるに至る。彼の友人である「ベナンの鳥」は地中にクロニアマンタルの形に穴を掘り、空虚な像を作る。これが神格化である。メルランが墓に埋められて迎えた裏返しの *épiphanie* の再現と取れる。(«[...] il faut que je lui sculpte une profonde statue en rien, comme la poésie et comme la gloire.»)

るに至った訳である。

『腐って行く魔術師』の草稿が同作品のプレオリジナル及び決定稿で採用されず、『虐殺された詩人』に転用された理由は必ずしも明白ではない。推察するに、メルランは地中にあり、泉を覗き見ることの出来る状況に無いため、ラウルを始めとする代わりの登場人物が当初必要になった。しかしその後、この複雑な人物設定と筋の二重展開（メルランとヴィヴィアヌ、泉の神とラウルの二重の筋立て）を捨て、ナルシス神話を背景に押し遣ることにより、『腐って行く魔術師』のプレオリジナル及び『決定稿』が成立したという見解が妥当に思われる。これを逆に考えれば、ラウルはメルランの分身であるという考え方になる。

以上の事柄を整理すると、アポリネールにとって神の誕生（或いは神の死）は神の顕現と同義であり、更に、神とのコミュニオンは神の顕現を前提として成立すると言えるであろう。その際に重要な役割を果たしているのは、ナルシスの泉である。

実は、ナルシス神話には幾つかのヴァージョンが存在するが、そのうち有名なオヴィディウスとパウサニアスのヴァージョンではナルシスは泉の岸辺で憔悴死しており、溺死するのはアレクサンドリア学派（ネオ・プラトニスム）を代表する哲学者、プロティノスのヴァージョンのみである¹⁹。プロティノスはナルシス神話を引いて、実体の無い映像に惑わされるナルシスの愚かさを指摘し、見せ掛けに惑わされることなく、真実（イデアのこと）を見ることを知ることの必要性を説く²⁰。こうしたナルシス批判がプロティノスの基本的態度である。プロティノスはその一方で、絵画や彫刻作品、すなわち虚像、鏡（真実を写したものという意味で）の中に真の美を見る可能性を否定していない（相変わらずナルシスは失敗者の例として引かれている）²¹。虚像としての事物の中にイデアを見出すプラトン以来の伝統をプロティノスは踏襲した訳である。従って、プロティノスのナルシス神話にオルフェウス

¹⁹ 但し、このことが直接、アポリネールがプロティノス思想に親しく接した根拠とならないことは言うまでも無い。恐らくはナルシス及び鏡を主題にした詩論が流行した 19 世紀末、何れかの作家が溺死説を広め、アポリネールも無批判にこれに倣ったのではないかと推測される。

尚、プロティノス思想におけるナルシス神話の意義に関してはヘレニスム思想に関する次の論文を参照した。Jean Pépin, «Plotin et le miroir de Dionysos», *Revue internationale de philosophie*, 24^e année, n° 91, 1970, pp. 304-320. Pierre Hadot, «Le Mythe de Narcisse et son interprétation par Plotin», *Nouvelle revue de psychanalyse*, n° 13, printemps 1976, pp. 81-108.

²⁰ Plotin, *Ennéades*, texte établi et traduit par Emile Bréhier, Les Belles Lettres, Paris, 1989, (Collection des Universités de France), I, 6,8,8.

²¹ Plotin, *Ennéades*, V, 8, 2, 34.

教におけるが如き *épiphanie* 理論を見るとしたら²²、少々穿ち過ぎの議論となるかもしれない²³。しかも残念ながら、アポリネールが何らかの形でプロティノスの思想に接した積極かつ客観的根拠を見出すことは出来ない（彼の作品中でプロティノスの名が語られたことは無く、比較的膨大な個人蔵書の中にプロティノス及び他のネオ・プラトニズムの思想家による著作は見出されない）。但し、前章引用文中のアレクサンドリアのユダヤ教という表現に見られる通り、アポリネールがアレクサンドリア学派に関する何らかの知識を有しており、*épiphanie* の主題に合わせて多少の目配せをした可能性も又、否定出来ない。

3. 神のイメージと神人同形論

アポリネールの作品中には韻文、散文を問わず人が神の似姿で作られたという観念がしばしば現れる。美しい赤毛の女の口は『神の口に似せて創られている²⁴』。

「神」と題された詩作品の中にも同様の観念が見出される。下の引用文はその前半部分である。

僕は人間性を捨て、強大で、傲慢に生きたい
何故なら僕は、神の似姿で創られたから
でも神と同じく僕は大きに運命に従えられている²⁵

この場合、主語は詩人である。詩人が神に似せて創られているという命題を言い換えると、神は詩人と同じ姿をしているということになる。つまり神人同形論である。

魔術師シモンの洗礼

「魔術師シモン」は『異端教祖株式会社』中の一作品である。魔術師シモ

²² これは私見だが、アポリネールがドーローネの絵画をオルフィズムと名付けたのは、彼の絵画に一種の *épiphanie* 理論を見出した故と思われる。

²³ 但し付け加えるならば、プラトンのイデア論にも鏡の表象が幾つか見られる。例を挙げるならば、『アルキビアデス』ではソクラテスが弟子のアルキビアデスに自分の目を見つめるよう命じ、アルキビアデス自身の姿を師の瞳に映すことが善のイデアに到達する道であると説く一節がある。

²⁴ *Po*, 303. : «Vous dont la bouche est faite à l'image de celle de Dieu»

²⁵ *Po*, 838. : «Je veux vivre inhumain, puissant et orgueilleux / Puisque je fus créé à l'image de Dieu / Mais comme un dieu je suis très soumis au destin / [...]

ンは『使徒行伝』第8章に、ペテロから金で洗礼の秘儀を買おうとし、叱責を受け、教え諭された人物として登場する。聖書の記述は簡潔である。同様に、アポリネールの「魔術師シモン」も洗礼の場面から始まる。カトリックの洗礼では通常、三位一体を構成する父と子と精霊の名において洗礼の秘蹟が施される。しかし、シモンは助祭フィリポから一応の洗礼を受けたものの、精霊の名による洗礼を受けていない。そこにペテロが登場し、両者間の問答が開始される。そして、ペテロは最終的にシモンに洗礼を施さないため、彼の受けた洗礼は結局、精霊の名において行われていない、中途半端な偽りの洗礼でしかないことになる。

ペテロとシモンの関係は、対立性と共通性によって編み出されている。十二使徒の筆頭で、キリスト教会を司るペテロと魔術を駆使して天使と悪魔を同時に従えるシモンとの間には善悪、正邪の明確な対立がある。一方、ペテロはイエスに出会う前にはシモンという名のガリラヤ湖の漁師であり（『マタイによる福音書』第4章参照）、魔術師シモンの洗礼名は反対にペテロである。更に、ペテロとの交渉が決裂するや、シモンは魔術を用いてペテロと瓜二つの姿になって（ペテロの生きた肖像となって²⁶）次のように宣言をする。

シモン・ペテロよ、私は他でもないお前自身である。我等の名もまた同じである。私はお前の統率する教会がある限り生き続けるだろう。お前は教会の善き羊飼いだ、私は永遠に教会の邪悪な主となる。お前が神の慈愛を示すならば、私は地獄の邪悪さとなって時には悪魔の部隊や何万もの天使の軍勢を動員しよう²⁷。

かくして、魔術師シモンは姿においてはペテロの正確な分身、写し身となったが、それは根本的に性質を異にする裏返しの、偽りの分身であり、強大な対立者、敵としてペテロの前に立ち現れたこととなる。

シモンの受けた洗礼は、シモンとペテロの類似、対立構造を構築する道具立てになっていることは明らかである。第一に、洗礼名と洗礼前の名が共通であること。第二に、不完全な洗礼はそのまま二人の対立図式となって表れていること。第三に、二人の対面を機に、シモンはペテロと同じ外見を具えるに至ったことがこのことを示している。

²⁶ Po, 133. : «la vivante image de Pierre»

²⁷ Po, 133. : «Simon-Pierre, je ne suis nul autre que celui que tu es, et nos noms sont les mêmes. Je vivrai aussi longtemps que l'Église où tu commandes. J'en deviens pour toujours le mauvais chef, tandis que tu es le bon pasteur. Et là où tu représenteras la bonté céleste, je serai l'infamale méchanceté qui met en branle, quand il me plaît, les légions de démons et les myriades d'anges.»

ここで対面という言葉を用いたが、二人はこの偽りの洗礼において当に面を向き合せている、互いを見合っていると考えられないだろうか。そして、瓜二つの二人の間には鏡があるのではないだろうか。外見上の共通性と、それと裏腹な性質上の対立はこの考え方により説明可能となる。つまり、シモンはペテロの空虚な分身、虚像であるという議論である。虚像であるためシモンはペテロに外見上一致するが、実質を持たず、偽りの存在に過ぎない。シモンの魔術にしても虚像によるまやかしの力ではなかろうか。そしてこの虚像の力がカトリックと対決しているのではないか。

これは前章で見た、メルランとヴィヴィアヌの間の類似性に見られた真と偽、似ている似ていないの対立図式と一致する。両者は湖面を通して外見は似ているが、実像と虚像との本質的相違を抱えていた。しかし、墓に一度入り自分も偽りの存在、虚像となるや、メルランは偽りの神として裏返しの誕生を果たした。クロニアマンタルも虚像になることで神格化を果たした。従って、魔術師シモンも偽りの洗礼を通して、偽りの神としてペテロの眼前に現れたという解釈が成立する。洗礼者ヨハネの前に現れ出たキリストの *épiphanie* はこの作品中で裏返され、魔術師シモンの洗礼の場面は偽りの神による *épiphanie* の場となったのである。

ここに至って、洗礼と *épiphanie* は混同されるに至る。より正確に言えば、裏返しの洗礼の中で裏返しの *épiphanie* が実現されるのである。「ラテン系ユダヤ人」のフェルニズンも又、洗礼の際に偽りの神となってネラの前に現れ出でたのではなかろうか。それが数々の奇蹟となって現れたのではないだろうか。彼は偽りの神であり、その意味で、シモンがペテロの洗礼を受けることが出来なかったように、カトリックによって聖別されることは無いように思われる。

神のイメージ

魔術師シモンは洗礼に次ぐ（皇帝ネロの前でペテロと力の優劣を競う）場面、魔術を駆使して空に悪魔と天使の壮大な軍勢を展開させる。更に、神の肢体が次々と現れ、最後に神の顔が天空に現れるに至る。シモンは空に上り神との対面を試みるが、ペテロの身振り一つで天空の軍勢は瓦解する²⁸。つまり、シモンの魔術は偽りのまやかしであることが判明する。従って、天空の軍勢もまた偽りの映像、虚像であったことが理解される。

²⁸ Po, 133-136.

シモンの魔術によって現われた神は偽りの神であり、恐らく魔術師シモン自身の空虚な映像に過ぎない（このことはシモンが神と対面するという状況から推察できる）。そして、この現われ出た神は人間と同じ肢体を持っている。これは第1章の最後で言及した神人同形論に一致するのではないだろうか。

ナルシスの泉に関しても同様である。もしナルシスの映像が偽りの神として現われ出るのであれば、その神はナルシスと同じ人間の姿形をしているのが道理である。アポリネールの考え方は、空虚な映像の彼方に真実の顕現を待望するものではない。虚像そのものが偽りの神として顕現することはメルランやクロニアマンタルの例で確認した通りである。つまり神格化の名の下に、形而上的なものの拒絶へと向かっていると言う複雑な事情がある。アポリネールのナルシスは泉の彼方の絶対的真理を求めている訳ではない。泉の水と同じく『真理は常に新しい²⁹』。水面に現れ出るのは、深淵から出現するイデア的存在ではなく、水面に映じた映像そのものである。神は映像以外の者ではなく、故に人と同じ姿をしているのである。そして、虚像としての神による *épiphane* は、アポリネールの芸術観を支える一つの軸となって行く。

神人同形論は前章で見た *épiphane* から導き出される当然の帰結であった。『異端教祖株式会社』所収の「洗聖」の主人公セラファン神父は『世界が神に立ち戻るためには、神自身が人間達の中に立ち戻らなければならない』と語っているが³⁰、付け加えるならば、神自身は人間達と同じ姿をしていなければならないのである。

最後に

アポリネールはキリスト教の *épiphane* が抱える矛盾、対立（具体的には洗礼との関わり、キリスト誕生との混同）を利用し、その価値を転倒させ、カトリックと対立した立場を取ることで、独自の *épiphane* 観を作品中で展開させた。それは『異端教祖株式会社』において特に顕著に見られる所であり、特に「異端」という言葉にこうした価値転倒が集約されている観がある。この裏返しの *épiphane* において、神は鏡の中の虚像として、そして詩人の虚像として顕現する。神の死というテーマには確かにニーチェの影響もあろう。しかし実は、本文中では触れなかったが、鏡及び *épiphane* は象徴主義からポ

²⁹ *Prll*, 8. : «La vérité sera toujours nouvelle.»

³⁰ *Prll*, 96. : «Pour que le monde revienne à Dieu, se disait-il, il faut que Dieu lui-même revienne parmi les hommes.»

スト象徴主義にかけて、年代で言えば 19 世紀末から 20 世紀初頭のベル・エポック期にかけて、詩人達の持つ共通の問題意識の中にあった。アポリネールの先輩詩人は何らかの形でこの問題と取り組んでいたことは、彼等の著作の題名を調べただけで瞭然とする。従って、アポリネールの *épiphany* もこうした時代の流れの中に位置付けることが出来よう。アポリネールの最初の努力は、その中で象徴主義以降の先輩詩人と如何に差異化を図るかにあった筈である。但し、虚像としての神の顕現というアポリネールの観点の中に、主客が消滅し、イデアリズムと無縁な実体の無い虚像だけが支配する完全なシミュラクル論を見ることは、ある意味で正しくない。第 3 章冒頭で引用した「神」と題された詩の後半部分にみられる『古代の本能』という言葉が示す通り、アポリネールの *épiphany* は、それを通して裏返しのポエジーが顕揚される特権的な古代の祝祭の場である。そこに古代からの異端の系譜、そして世紀末以来のフランス詩の系譜の中で自らの立場を明らかにしようとするアポリネールの詩人としての自負を読み取ることが出来るのではなからうか。